

日本ユーラシア協会とは  
旧ソ連邦に住む諸国民  
との相互理解と友好を  
進める（旧）日ソ協会  
の後身組織



**日本とユーラシア**  
**Япония и Евразия**  
愛知版 NO.679  
HP: <https://eurasia-aichi.beet.jp>

ニュース、投稿は下記へ  
〒461-0004  
名古屋市東区葵1-22-26  
日本ユーラシア協会愛知県連合会  
電話 052-508-4368  
Mail: [eurasia\\_aichi@yahoo.co.jp](mailto:eurasia_aichi@yahoo.co.jp)

## 第71回 日本ユーラシア協会愛知県連総会報告

日本ユーラシア協会愛知県連会理事長代行 中山 顕

東海地方でも梅雨入りが発表された2026年6月7日(日)、第71回愛知県連総会が開催されました。参加者数は対面及びオンラインの合計38名。総会に先立ち、県連のロシア語講座を長きにわり支えてくださっている山崎タチアナ先生から「いくつかのふるさと〜ことばの空間」と題して講演していただきました。

ソ連出身のタチアナ先生にとって「ふるさと」は五つあります。愛読書のユーリ・トリフォノフ『永遠のテーマ』からインスピレーションをうけて、五つのふるさと、その自然、出会った人々、出会った本、その時々において心に刻み込まれた「ことば」を添えて詩情豊かに語られました。

第一のふるさとは、果てしない草原の広がるステップ地帯、アゾフ海沿いの炭鉱町。夏には雨雲を追いかけ、雨のつくりだした「水の壁」に飛び込んで遊んだ思い出。チェーホフ『ステップ』の主人公が大草原のなかで見た一本のポプラの木、厳しい世の中をたった1人で生きている私たち人間のシンボルのように思えた。冬のステップは雪のじゅうたん、プーシキンが詩のなかで **великолепный**（見事にかたどった）と形容したその天然の造形美が鮮明に思い出される。

第二のふるさとは、母の故郷の西ウクライナの豊かな森。そこで母から森のベリーやキノコについていろいろと教わった。ヨシフ・ブロツスキー『一部屋半』にでてくる「最高のシェフはわが母」の一節や、ゴーゴリの作中で描かれた場面のように「ウクライナ人の特技はおいしいものを沢山食べること」の言葉が父や母の思い出に重なる。将来は、生物気候学者になりたくて森に関する本をよく読んでいた。ヴィタリー・ビアンキ『森の新聞』が大好きで、自分でも森の観察日記を書いていた。多感な十代をむか

え19世紀ロシア文学に傾倒していったけれども、本の中の自然の描写が好きになったのはウクライナでの経験がおおきかった。

【次頁へ続く】



第三のふるさは、文学の都レニングラード（現サンクトペテルブルグ）。ここで過ごした大学四年間、休日にはネフスキー大通りをエルミタージュ美術館からモスクワ駅まで往来し、ドストエフスキー『罪と罰』の主人公と同じS横町の下宿先からセンナヤ広場へと抜ける道を行くと、まるで小説の中に自分がいるような気がした。教育実習をうけたミハイロフスキー宮殿は、かつて士官候補生だったドストエフスキーが寝泊まりしていた部屋があり、旧オーストリア大使館だった大学の校舎にはプーシキンが度々訪れていた。ロシア文学の中心で時間を越えて文豪達と交錯する体験はえも言えぬ感動を覚えた。



第四のふるさは、就職先のヴォルガ河近郊の町、そこでの思い出は寛大で優しい心をもった人々との出会いだった。友人と一緒に「ステンカラージンの崖」にのぼり、その上から両手をひろげ胸いっぱい息を吸い込みでた言葉、**Вот это да!**（すごい!）、その雄大な景色に圧倒された。

そして、そこで運命の人と出会い、最後の五つめのふるさと、「神秘の惑星」日本にやってくる。日本に行くときに、母から送られたことばは「遠くに住んでいる両親よりもそばにいる夫を大切に」「日本の食事を食べて、日本のやり方にしがちなさい」だった。日本で一番好きな風景はいなかの田んぼ。それが私にとってのふるさと日本の風景。日本にありがとう、日本のみなさんにありがとうと言いたい、**Спасибо!**、ウクライナ語で**Дякую!**。



休憩をはさんで開かれた総会では、大国の傍若無人ぶりに混迷を極める現下の国際情勢や世界中で顕在化している民主主義の危機に対して、平和・人権・民主主義を基本にユーラシア諸国の市民がコミュニケーションをとり合い、つながり合うことの重要性を再確認し、愛知県連の本年度活動方針について討議、承認されました。



## 再びカザフスタンへ②ー 完成しない街で 会員 白村 直也

2026年4月4日（土）、私は中部国際空港を出発し、韓国の仁川国際空港へ向かった。翌5日（日）の早朝便で、カザフスタン・アスタナへ乗り継ぐ。

仁川からアスタナまでは約6時間のフライトだった。窓の外には海の青さが途切れ、やがて大陸の広がりへと景色が変わっていく。ユーラシアのスケールが、少しずつ身体に入ってくる時間だった。

昼頃、ナザルバエフ国際空港に到着した。外に出ると、前回の訪問で知り合った友人が迎えに来ていた。1年ぶりの再会だったが、車に乗るとすぐに会話が始まり、この1年の出来事や家族の話へと自然に流れていく。彼は10日後に結婚式を控えており、その話題になると表情が明るくなった。この瞬間、この国では人との距離が思ったより近いのかもしれないと感じた。

宿泊したのは「レイカッツ・アスタナ」（<https://reikartz.com/en/hotels/reikartz-park-astana/>）である。バイテレク塔から徒歩10分ほど、中央省庁街にも近く、1泊約9000円（朝食付き）。シンプルだが清潔で、滞在先としては十分だった。

また驚いたことに、同じホテルにはカザフスタン女子バレーボールナショナルチームも滞在していた。ロビーや廊下ですれ違うたび、その圧倒的な身長に目を奪われた。日常空間に「代表選手」という別世界が入り込んでいた。

ロビーで今回の訪問について打ち合わせを終えると友人は帰宅し、私は街へ出た。ホテル近くの両替所で当面



スーパーのお弁当

の所持金300ドルをテングに換えるためだった（約1週間滞在したが、結局使い切らなかった）。前回は空港で両替したが、市内の方がレートが良いと聞き、今回はあえて市内を選んだ。確かにわずかだが市内の方が良かったように思う。手元に現地通貨があるだけで、街との距離が少し縮まる。

そのまま歩くと新しいカフェを見つけた。昨年にはなかった店である。私はラテを購入し、近くの公園へ向かった。その公園は昨年工事中だったこともあり、気になって立ち寄ってみた。公園自体はまだ整備の途中だったが、周囲では高層ビルの建設が進んでいる。

その速度の違いに、この街がどこへ力を注いでいるのかが透けて見えた。

4月の空気は思ったよりやわらかく、上着2枚で十分だった。雪もほとんどない。スーパーでは写真のようなお弁当が約1200テンゲ（約400円）で売られていた。そうした小さな価格の積み重ねが、この街での暮らしの実感を少しずつ形づくっていった。



立ち寄ったカフェ

## 雑談ユーラシア あれこれ（第3回）名古屋経済大学 市橋 克哉

## Усадьба «Узкое»（莊園「ウスコエ」）

今回は、「モスクワ旅行案内」には載っていない豊かな自然と歴史を体感できるモスクワの景勝地、莊園「ウスコエ」を紹介します。

ここは、モスクワ市の南西地区、「ビツェの森」自然・歴史公園（東京ドームが472個入る広大な公園）内にある、かつての貴族の莊園で、革命後はサナトリウム（санаторий）として利用されてきた地域です。前回紹介したわたしたちが暮らした科学アカデミー宿舍の目の前に広がる森林公園であり、いつも散策していたところです。森林浴（モスクワっ子は裸で日光浴）の春・夏、白樺等が金色に染まる「黄金の秋」、ダイヤモンドダストがきらめき、木橋で滑ったり結氷した池に穴をあけ釣りをしたりした厳寒など、四季それぞれの楽しい思い出があるところです。

YouTube →

Осенняя прогулка по усадьбе «Узкое»(01.10.2016)

（秋の莊園「ウスコエ」）



また、莊園「ウスコエ」は、帝政ロシアおよびソ連の知識人（интеллигенция）にとっては、「Республика Санузия」（サヌウジエ共和国、санаторийとузкоеをかけ合わせた造語）と呼ばれたアゴラ（自由な交流の場）でした。帝政ロシア時代のウラジーミル・ソロヴィヨフ（Владимир Сергеевич Соловьёв）ら体制におもねない宗教哲学者たち、そして、革命後は、科学アカデミーのサナトリウムになったことから、ボリス・パステルナーク（Борис Леонидович Пастернак）、ウラジーミル・マヤコフスキー（Владимир Владимирович Маяковский）ら文学者をはじめとする知識人の創造と休息のサンクチュアリーでした。したがって、莊園「ウスコエ」は、豊かな自然を満喫した思い出の場所であるとともに、知識人が集う自由で学術的な共創空間（共同体）、知識人版「梁山泊」とでも言うべき独特の文化が脈々と受け継がれている場所でもありました。これは、日本にはない羨ましい文化だと思い、90年代、21世紀へと続くロシアの激動の時代、莊園「ウスコエ」の行く末について、果たして大丈夫かとずっと心配していたのです。

そんななか、2024年8月、憂慮すべきニュースが飛び込んできました。かつての貴族屋敷（革命後のサナトリウム）に付属する木造住宅数棟が、モスクワ市によってわずか数時間で取り壊されたのです。都市再開発計画の一環として、モスクワ市は、保護運動家の意見書や集めた署名を無視して、これらの住宅地を特別保護自然地域から除外して住宅を除却しました。保護運動家は、歴史遺産である貴族屋敷に付属しそれと一体をなす文化的・歴史的価値を有する建物と主張したのですが、文化遺産登録がないため通常の住宅とみなしてモスクワ市は取り壊したのです。

【次頁へ続く】



この「住宅取り壊し事件」をみると、ロシアでは、都市再開発計画が策定されると、行政には広範な裁量権が付与され、再開発目的を達成することが優先されがちとなり、たとえ自然保護法に基づく特別保護自然地域であっても、容易に、用途の変更がおこなわれたり、即時に「開発」のための実力行使が行われたりしていることがわかります。開発をめざすための広範な行政裁量権が行使されると、環境保護、文化財保護・住民参加は後退する仕組みと運用があることがみえてきます。

YouTube →

Массовый снос домов в усадьбе "Узкое"  
（「住宅取り壊し事件」を伝えるニュース）



はて？わずか数時間の実力行使で一気に目的を達成した「住宅取り壊し事件」は、日本だったら起こるでしょうか？つつい業のなせるわざで、「雑談」のはずが「法の比較」をしてしまいます。一般論でいえばですが、日本ではこの事件は起こらないでしょう。地権者合意があり、都市計画決定があり、住民への公告・縦覧があり等々、計画策定手続だけをみても、少なくとも数年はかかりますから、この種の問題で、即時強制として行われる実力行使はあり得ないのです。

この種の実力行使手法をみると、さきにみた知識人版「梁山泊」文化の継続と並んで、帝政ロシア・ソビエト由来の、こちらは法の文化の継続をみることができるのです。



## 第87回ロシア語検定試験実施報告

ロシア語講師 服部 和

5月31日（日）に愛知民主会館でロシア語能力検定試験が行われました。10時からが4級、午後2時から3級の試験です。4級の受験を申し込まれたのは14名で、3級は10名でしたがそれぞれ3名ずつ欠席でした。会場を眺めますとスカーフをかぶったイスラム教徒風の方やスラブ系の方かなと思われるお顔の方もおられて、以前と比べると受験生も多様化してきているようです。3、4級とも受験生が手元のICレコーダーで朗読を吹き込むのですが、使い慣れないレコーダーですし、緊張もあって、録音がちゃんとできなかったというケースが時々あります。今回もお一人だけ緊張のあまりレコーダーのスイッチを入れ忘れたという方があり、すぐにその場で再試験となりました。年に2回しかない試験ですし、受験料も安くはありません。試験監督もミスがないようにと緊張して、皆さんを見守りつつご健闘をお祈りしておりました。

## 第101回ロシア語サロン報告 ロシア語講師 服部 和

4月26日（日）午後1時からロシア語教室で第101回ロシア語サロンが開かれました。今回のゲストは2月のサモワールお茶会にもゲストとしてきてくださった小川マリアさんです。マリアさんはロシアのサラトフ州のご出身のロシア人です。日本でもクリスマスは今や国民的祝日レベルのお祝になっていますが、キリスト教徒にとってはもっとも大切な祝日の復活祭（イースター）についてはあまり知られていません。今回はマリアさんがそのイースターについて話してくださいました。復活祭ーロシア語ではПасха（パスハ）ーはイエス・キリストの復活を祝う、ロシア正教徒にとっての重要な祝日です。

すべての人の罪を背負ってイエス様が十字架に磔になり、その埋葬から3日目に復活したことは信仰の礎です。パスハは毎年祝う日が違う移動祝祭日でかならず日曜日です。パスハの前には約40日間の精進の期間（Великий пост）があります。これは肉や魚など食べものを制限するだけではなく、心や体を清め、悪癖や悪い行いを慎む時期でもあります。パスハの直前の一週間（受難週）は特に厳しく身を慎み、食べものの制限も厳しくなる時期なのですが、この週の聖木曜日には盛大なお祝いの準備が始まります。この日は「清めの木曜日」とも呼ばれていて罪を清めるために体も清潔にし、家の中もきちんと整えることになっています。お祝いの特別なパン、クリーチが焼かれ、ゆで卵にはきれいに色が塗られます。マリアさんは復活祭のパン、クリーチを差し入れてくださったのでティータイムにみんなで少しずついただき、ロシア語で自己紹介をしました。今回は9月の特別講座で講演をしていただくウズベキスタン出身のチャガイ先生にも来ていただきました。きれいに飾り付けたゆで卵も用意して参加者のみなさんに見ていただきました。最後にみんなで卵を手記に記念撮影！

今日のテーブルを飾るためにイースターエッグを製作しました！異教徒が作ったものなので、、、残念ながら教会で神父さんに清めていただいていませんが、

参加された皆さんにお土産にさしあげました。

